

門 司 正 三 教 授

古 沢 潔 夫 (植物園)

教授は、いろいろと、たくさんの特徴を、お持ちですから——編集の方のいわれるように——その一端を、ここに記します。

門司教授はサイエンスの中道を進んでこられた。左に道を外れ、観念論の域に踏入ことなく、右へ片寄って、無味乾燥な記載学の手摺テスリに凭り掛ることなく、常に中庸を持して、大地に根を張る植物が、太陽の光を求める如く、休むことなく、垣々と一歩一歩を踏みしめて、植物生態学に、光明ある分野を開拓された。

学問の大道の左の端すれすれに、巧みなるアクロバットよろしく、仮説の空理を弄ぶ如き先輩を左目でみや

り、「アレデハ、アブナイね。」と——。

右の眼では、道の右側ぎりぎりに、思想を避け、(全くの無思想か?) 幾十年、機械的操作を繰返して厭きない同僚を見据え、決して、それに誘われることなく、「アレデハ、オモシロクナイよ。」と——。

自らは、不偏、不党、似而非哲学的、疑似宗教的な、思弁を斥ぞけ、スタイン・コップフに墮することなく、自然科学の中央線を、毎日、破綻なく運行してこられました。(昭和五十年元旦、マイン河のほとり、マインツにて)